

1 団塊世代の人口ボリューム

団塊世代は現在の約2.5倍の出生数

一般に団塊世代という場合には、1947年から49年までの3年間に生まれた世代を指す。厚生労働省の『人口動態統計』によると、この3年間の出生数は約806万人で、その後の3年間の約648万人に比べて24.3%も多い。最近の3年間（2003年～2005年）の約330万人からすると、およそ2.5倍近い出生数に当たる。

現存する人口でみると、2005年の総務省統計局『国勢調査』では約678万人で、これは全人口の約5.3%に相当する。しかも、この世代に続く3年間も年間出生数は200万人を超えている。このため、51年生まれまで含めて、合計5年の間に生まれた人たちを、広義の団塊の世代と呼ぶこともある。

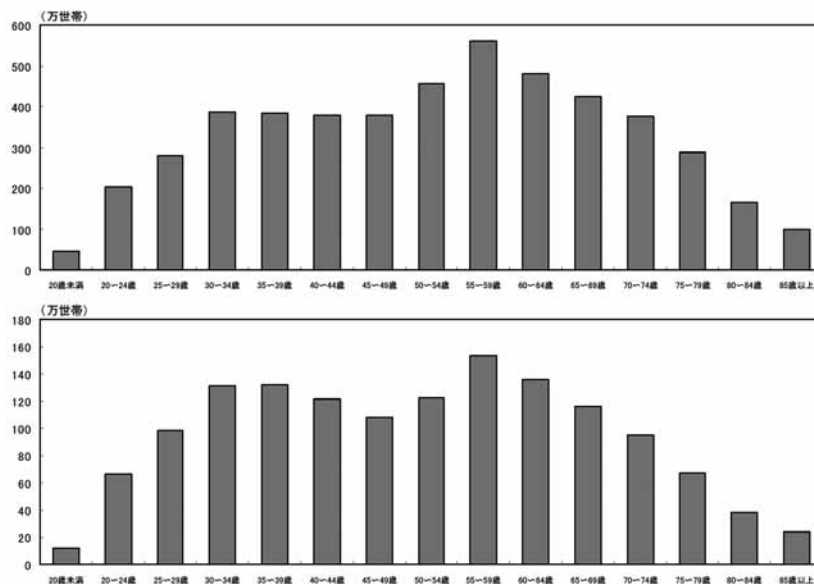
そこで、この世代まで含めた「拡大団塊世代」の現存人口をみると、約1084万人となり、人口比で8.5%に達する。わずか5歳分の世代だけで、全人口の1割近くを占めるわけで、その存在感はますます大きなものになる。この傾向は一都三県だけでみてもほとんど変わらない。

団塊世代の世帯数は全世帯の1割を超える

この拡大団塊世代が世帯主の世帯数は全国では約561万世帯で、うち一都三県が約154万世帯。全世帯に占める割合は、全国では11.4%で、一都三県が10.8%に達する。人口では1割弱だが、世帯数でみると全世帯の1割以上を占めているわけである。

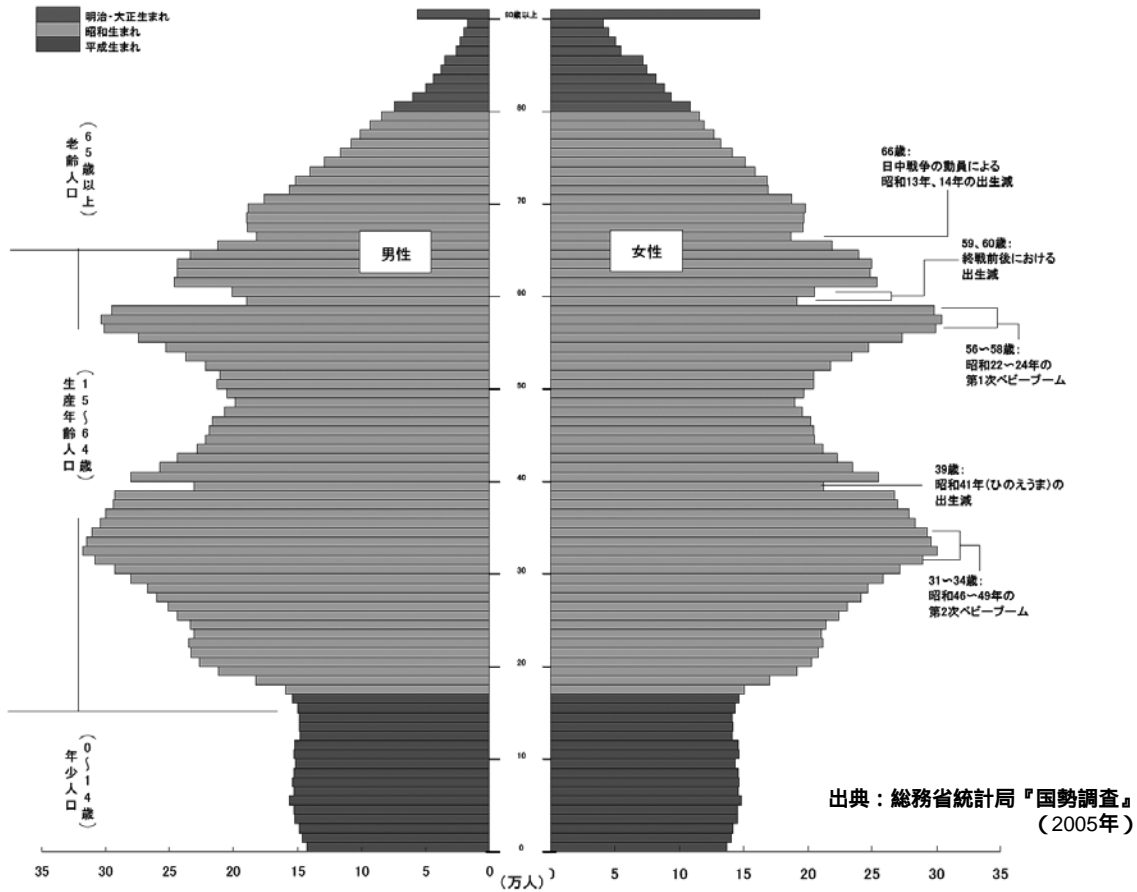
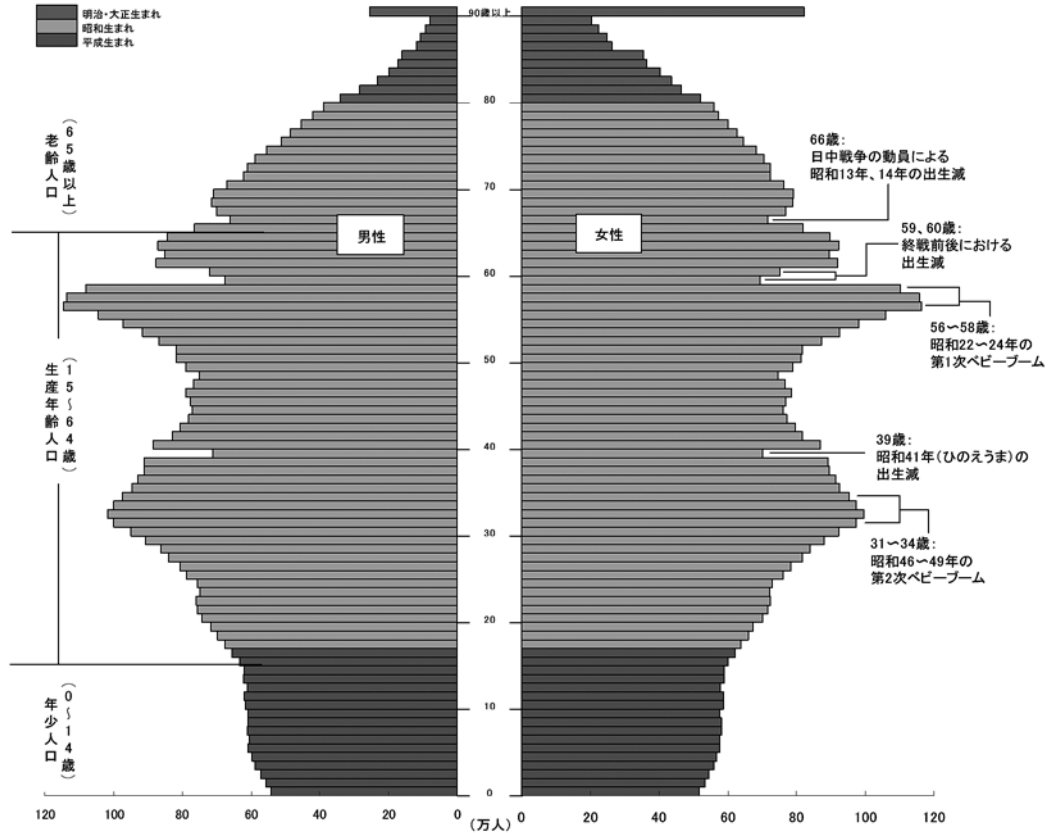
このように量的にみると、他の世代に比べて圧倒的な存在感を持つ団塊世代。では、質的にみれば団塊世代はどのような世代であるのか、以降では「周囲と異なる特質」をみていくことにする。

世帯数（上段：全国 / 下段：一都三県）



出典：総務省統計局『国勢調査』（2005年）

人口構成（上段：全国 / 下段：一都三県）

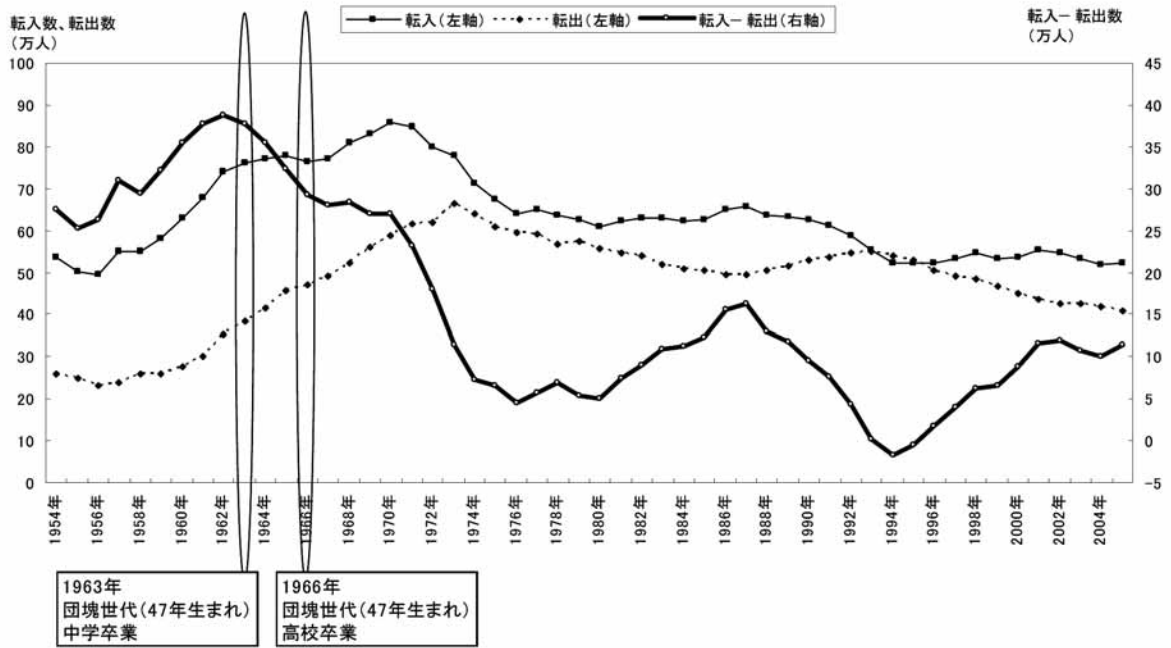


集団就職や進学で大都市部に集中

団塊世代は兄弟姉妹が多く、長男以外の多くは大都市部に出ることになる。地方の零細農家では多数の家族を養う力はなく、一方高度成長に沸く都市部では多くの人手を必要としていた。中学卒の集団就職列車が仕立てられ、彼ら、彼女らは“金の卵”ともてはやされた。また、短大や大学などへの進学も徐々に増えてきたが、地元には大学や短大を出た高学歴の団塊世代の受け入れ先がないために、大都市部で仕事を求めざるを得なかった。

『住民基本台帳人口移動報告』をみると、団塊世代が中学を卒業する1960年代前半から、一都三県への人口流入が急速に増加していることがわかる。1949年生まれの人が大学を卒業する1971年まで、一都三県への転入超過は年間20万人～30万人規模に達している。この人たちがそのまま一都三県に定着し、そこで団塊ジュニアが誕生するわけだが、人口ピラミッドにみる団塊ジュニアの突出は、すぐれて大都市部、なかでも一都三県特有の現象となっている。地方圏では団塊ジュニア世代が前後に比べて特に多くなっている傾向はみられないのである。

一都三県への転入数、転出数、およびその差の推移



出典：総務省統計局『住民基本台帳人口移動報告』(2005年年報)